タイトル	オランウータンを救え　―パームオイルは，人と地球に優しい？―
実践者／団体名	佐野恵広
実施日・期間	２０１２年４月～２０１３年３月
主な実施場所	岡崎市立井田小学校５年５組教室
参加者及び人数	岡崎市立井田小学校５年５組児童３７名
目標・ねらい	マレーシアのコタ・キナバル日本人学校に赴任していた時に，修学旅行や野外学習でパームオイル工場，セピロク・オランウータン・リハビリテーションセンター，エビ工場，キナバタンガン川流域のジャングル，合板工場，ＪＩＣＡの施設などへ連れて行った。その頃からジャングルの森林伐採が問題視され始めていて，ＪＩＣＡが常駐して環境保全のための植樹などを行っていたが，日本ではなかなか取り上げられる状態ではなかった。COP１０が日本で開催されたことで，ボルネオ島が中日新聞でも大きく取り上げられ，その時の児童にも１年間学習させたが，他にも学習内容があって行動に移すまでには至らなかった。今回は，その反省をふまえて，１年間を見通し，課題設定から情報収集・情報処理，追究内容の共有，実践，さらには発信へと段階を追って取り組んだ。パームオイルを教材として取り上げることにより，子どもたちに，地球環境や生物多様性について考えさせながら，現地の人々の生活，自分たちの生活とも上手に折り合いをつけて持続可能な環境を未来へとつなげていくことの大切さや，今現在の自分たちがやるべきこと，できることを考えさせていきたいと考えた。

具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

オランウータン・リハビリセンター

１　オランウータンの危機（ボルネオ島の動物たちの現状）

「目がくりくりしていてかわいい。」「人間の赤ちゃんみたい。」　マレー語で「森の人」と呼ばれるオランウータン。その写真を見せると，子どもたちは，人間の赤ちゃんに似たその愛らしさに親近感を覚えた。次に，教師の撮ってきたセピロック・オランウータン・リハビリテーション・センターと油ヤシのプランテーション，油ヤシ工場のビデオを見せ，ボルネオ島に住むオランウータンや野生の象を始めとする動物たちの置かれている現状とその原因を学んだ。

自分たちの生活に欠かせない製品の多くにはパーム油が使われており，それを採取する油ヤシ栽培のために人間たちがボルネオ島のジャングルを破壊。それがオランウータンやボルネオ象の絶滅を加速させていることに驚き，なんとかしなければと思い始めた。感想に見られるように，自分たちのできることを考え始めた子。さらに一歩進んでプロジェクトに参加したいと考えた子まで様々であった。

２　オランウータンを救うには

「オランウータンを守るにはどうしたらよいか」をテーマに掲げて，パネル討論をした。オランウータンを守る方法として，いくつも意見が出てきた。似ているアイデアをまとめていき，自分の取り組みたい活動を選んで次の５つのグループに分かれた。「緑を増やすための募金をする」「パーム油製品を無駄遣いしない」「ボルネオ島のことを調べてポスターで伝える」「オランウータンのことを調べてブログで伝える」「油ヤシのプランテーションを減らして木を植える」。そして，自分たちの立場，理由と具体例，予想される反対意見や質問に対する回答をグループごとに話し合った。子どもたちもボルネオ島に関心を持ち始めていたので，意欲的に学習に取り組み，準備を整えてパネル討論を行った。

パーム油は人類が生活を便利で豊かなものにするために必要な物であり，現地の人たちにとっても生活の糧。簡単には土地を買い戻して植林をするのは難しい。子供たちの意見は正しいとはいえ，まだ現実味を帯びているとは言い難いものもある。しかし，ＷＷＦなど動物保護団体について下調べをした子たち

もいて，実際に行動に移せる意見も出てきた。また，自分たちからまず行動するべきだと考え始めており，意識も高まってきている。そこで，さらに現実的に考えることができるように，動物の立場だけでなく，実際の消費者である自分たちの立場，プランテーション経営者の立場，そこで働く労働者の立場，現在各種団体が行っているボランティア活動についても調べていくことにした。

２　身の回りにあるパームオイル製品を調べよう

パームオイル製品

実際に自分たちが食用にしていたり，生活必需品として使ったりしている物の中に，どれぐらいパームオイルが使われているか調べてみることにした。

子どもたちの家では，アイスクリーム，インスタントラーメン，インスタント焼きそば，冷凍食品，カレーライスやハヤシライスなどのルー，ポテトチップスなどのスナック菓子，石けんや化粧品などが確認された。子どもたちが調べた中には，植物性油，植物性油脂と書かれているだけで，何の植物か分からない商品の方がさらに多かった。それらにもパーム油が使われている可能性が高いと思われるので，身の回りの多くの商品にパーム油が使われていると思われた。子どもたちは，「パーム油が，これだけぼくたちの生活の中で使われていては買わないわけにはいかない。」「パーム油製品がなければ生活していけないかもしれない。」という結論に達した。しかし，「できる限り無駄遣いしないで大切に使っていこうと思う。」「動物たちに申し訳ないから，大切にありがたく食べさせてもらう。」「プランテーションを無くすことはできないけど，動物を助けるために，少しでもいいから動物にジャングルを返したい。」と考え始めた。

３　現地の人たちの暮らし

油ヤシプランテーション

中日新聞の記事を使い，家族が生活していくために学校に行かず，油ヤシのプランテーションで働く１６才の男の子の話を紹介した。プランテーションのおかげで，働いて現金収入を得ることができ，父母を助けながら家族を養っていけるようになったそうだ。

４月に「世界一大きな授業」を行ったおり，世界には生活苦のために，学校に通わず家事をしたり，働きに出たりしている子どもたちが大勢いることを学んだ。その子たちを助けるために総理大臣宛に署名運動も行った。この新聞記事に載っているアルデム君が，その子たちとダブって見えてきて，オランウータンを救いたいと思いながらもアルデム君の生活も保障したい。両方生かす方法はないかと考えるようになっていった。

油ヤシの出荷

４　プランテーション農場主の立場

パームオイル工場

熱帯雨林を失った野生の象が油ヤシプランテーションに入り込んで油ヤシの実を食い荒らす。新しく植えた若い木を倒す。農園主たちは，電気が流れるフェンスを張り巡らし，象が来ると労働者を総動員して火をたいて追い払う。中には密かに射殺してしまう場合もあることを知る。日本でも害獣から畑を守るために様々な取り組みをしているニュースが時々流れる。「うちのおじいさんも，畑にいのししや猿が来て荒らしていくから困っていると言っていました。」と，子どもたちの祖父母も農作物を荒らされて苦労しているという事実がある。また，学区の半分程が新興住宅街であり，森林を住宅地に開発しているためか，学校にタヌキが来ることがあり，ジブリ映画「平成狸合戦ポンポコ」も思い起こした。動物がかわいそうだからと言って，簡単には畑や住宅地を森にもどしてあげるというわけにもいかないことを，身近な例でも知り，動物を助けるのが簡単ではないことに気付いていった。

５　ボルネオのジャングルを守るには

キナバタンガン川流域の
ジャングル

折しも福山雅治さんの「ホットスポット・最後の楽園」が冬休みに放映され，それを見のがした子供たちのために学校で全員で視聴した。自分たちの活動の必要性を知り，子供たちは，今まで以上にボランティア活動への意欲を高めていった。ここで，今までの学習を振り返り，動物たちの現状，我々の生活，現地の人たちの生活を確認し合った。そして，動物たちも人間も幸せに暮らせる方法，地球環境を維持していく方法を話し合った。まずは，「もしぼくが世界大統領になれたら…」という理想像から始めた。子どもたちの考えのほとんどが，ジャングルと油ヤシプランテーションの両方を工夫して残していくアイデアで

あった。さらにそこにたどり着くまで，今やるべきことを考えた。「ジャングルを増やしている団体に寄付したり，企業のサポートグッズを買ったりする。」「他のクラスの子たちにポスターで，オランウータンのことや寄付の方法を伝える。」「パーム油が使われている製品を見せて，人間がどれだけ必要としているか知らせる。」などの意見が出てきた。今，子どもたちは現実的に自分たちが，今すぐ実行に移せることを模索し始めた。

発信のための準備

「バッジをつけてあげるね。ジャングルを守ろう

7　オランウータンを救え！

子供たちは，話し合った末に，まずは自分たちが募金をすることにした。募金先は，直接ボルネオ島のジャングルを増やす活動をしているボルネオ・トラスト・ジャパン。調べてきたボルネオ島のことを家の人に話して協力してもらい，自分の小遣いも入れて募金を集めた。そして，クラス全員で郵便局へ行き，募金をした。郵便局には，客として学区の方がみえたので，自分たちの活動の趣旨を告げると，その方もそれに賛同して貯金をおろして一緒に募金をしてくださった。子供たちは，発信することの効果を改めて知ることができた。

学校へ戻ると，さっそく，全校児童や学区への発信をしようと計画を立て始めた。子供たちの考えた発信方法は４段階。パーム油の必要性，動物の現状，現地で働く人について，全校児童に「伝える」，「覚えてもらう」，「印象づける」，「思い出して、家族に伝えてもらう」である。

① 伝える（劇や紙芝居を使って楽しく分かり易く伝える）
② 覚えてもらう（○×クイズ，三択クイズで楽しく覚えてもらう）
③ 印象づける（輪ゴム鉄砲の的当て，油ヤシを撃つとジャングルになる）
　　（輪投げ，折り紙の動物を森をあしらった輪に入れてあげる）
④ 思い出し，伝えてもらう（動物シール，動物バッジ，勉強したことをまとめたちらしを配布し，家で思い出し，家族に伝えてもらう）

グループに分かれて準備・練習をして，交流学級の２年生を招待してボルネオ島の現状や協力してほしいことを伝えた。準備・練習に予定以上に時間がかかったため，ここまでの活動で１年が終わってしまい，全校児童や学区の人々に伝えることができなかったのが残念であった。

教材・資料	使用した資料 ・ボルネオ島で撮影してきたビデオと写真 　セピロク・オランウータンセンター，油ヤシのプランテーション， 　油ヤシ精製工場，エビ工場，合板工場 ・子供たちの集めたパームオイル製品 ・PLAN JAPAN の世界一大きな授業の資料 ・中日新聞の記事 2010 年 ・ボルネオ・トラスト・ジャパンのパンフレット，ホームページ ・株式会社サラヤのホームページ ・NHK 番組福山雅治さんの「ホットスポット・最後の楽園」2013 年１月３日
成果	ボルネオ島の動物たちの現状と我々の生活と切り離せないパームオイル，現地の人々の生活を比較させながら考えさせること，また，自分たちの身近で起きている農地拡張や宅地開発と動物たちとの問題を取り上げることで，単なる環境保全ではなく，自分たちの生活と動物たちの生活・自然環境を折り合いを付けながら共存共栄していく道を考えながら自然環境の保全と利用について考えさせ，意識を高めることができた。さらに，その中で自分たちが今できることやすべきことを模索させ，募金や発信をしてボルネオ島の保全活動に参加させることで，保全活動の一端を担い，自分たちの生活も見直して行動しようとすることができた。
発展	**さらにこの活動を，学校全体，学区へと発信対象を広げていき，子供たちの思いを伝え，学校・学区ぐるみの活動へと発展させていきたいと考えている。これらの学習を通して，生物多様性の重要性，持続可能な社会のあり方を考えることで，子どもたちが，人間と自然が共生できる持続可能な地球環境を引き継ぎ，近い将来，さらに良い方向に向けていってほしいと願っている。**

子どもたちの感想（オランウータンの現状について）

- 自分たちが使っている石けんやアイスの原料に使われているパームオイルが，ジャングルの森を燃やして作られ，そのせいでオランウータンなどそこに住む動物が減っていくのは残念。
- 身近で使っている物が森を減らしているとは考えたこともなかった。森のことを考えながら，無駄遣いしないようにしていきたい。
- オランウータンのためにも森を増やしてあげたい。私たちのできることは使う量を減らすことだと思う。身近な物は使わないわけにはいかないから，量だけでも世界中の人が減らしたら良いと思う。
- 自分たちのことだけでなく，動物が生きるということについても考えようと思った。自然を大切にし，動物を絶滅させないようにがんばろうと思った。
- オランウータンの少なさに驚いた。油ヤシの実も大切だと思うけど，オランウータンのジャングルも大切だと思う。できたら，わたしもオランウータンを助けるプロジェクトに参加したい。
- 誰かが楽をしていると，誰かがどこかで泣いている。泣く人や泣く動物がないようにしたい。
- ぼくたちはオランウータンのように住む家がなくなるということはないからその気持ちは分からなかった。これからはオランウータンの気持ちも考えて生活したい。

パネル討論

	植林チーム	募金チーム	ブログチーム	無駄遣いしないチーム	ポスターチーム
パネリストの意見	木を植えれば，絶滅の危機を救える。絶滅の危機を救っているボランティアの人たちのことを伝え，募金をして木やビニルの壁を買って送る。	募金は大人の手を借りずに子どもたちの手でできる。ポスターで理解させて，全校から募金を集める。そして，WWFに寄付する。	ブログは，オランウータンのことを世界中の人に，たくさん説明をすることができる。動画も入れられる。	無駄遣いしないのは誰でもできる。パームオイルの量を減らせる。買いすぎに注意させるため，商品の値段を高くして買わなくなるようにさせる。	ポスターにかいて下駄箱に貼り，全校のみんなにオランウータンのことを知らせる。ポスターは，ブログよりも温かみがある。知らない人に知ってもらえる。
質疑応答の一部	Q木は１本では足りない。すごいお金がかかる。送るのにもお金がかかる。 Aちょっとずつでも続けていけば大きな森になる。 Q木を植える場所は？植える土地もお金がいる。 A１本でも油ヤシを減らしてもらって植える。	Q募金は，東北の方が大事だと思う。今は集まらないのでは？ A東北には，前，学校で募金した。わたしたちがまずやって，できれば学校に広める。 Qどうやって集めたお金を送るのか？ AWWFの野生動物を守るグループに送る。郵便局で送ることができる。	Qブログは大人でないとできない。 A家の人や先生に協力してもらう。 Q検索してもらわないと見てもらえない。 Aまず，ツイッターに書き込んで世界中の人に知らせる。そしてブログを見てもらうように頼む。	Q無駄遣いしなければジャングルは増えるのか。 A余分なプランテーションが減る。これからは増えない。 Q高くするとみんな買わない。売れなければ安くなる。 A生活に必要な分は高くても買う。会社に協力してもらい，高い分を募金してもらう。	Q見た一部の人にしか分からない。 A少しでも，知ってもらえればいい。そこから伝わっていく。 Q学校以外の人はどうするか。 Aポスターにかいて，さらにホームページを作って詳しく書いたのを見せればいい。

全体での話し合い　（抜粋）

- ポスターをかいてオランウータンのことを知らせ，全校に呼びかけて募金を集めるのがいい。
- ポスターとブログと募金がいい。ポスターはその場の人だけ。さらにブログを作って世界中の人に知らせると良い。
- 無駄遣いをしないのは分かり易く，すぐにできる。些細なことからでも，ボルネオの自然に役立つ。
- とにかく木を植えないと助からないから，森が増えるようにしないといけない。
- 募金で木を買って送れば，オランウータンの一番近いところまで届く活動だからよい。
- 全部の活動をまとめた方が効率がよいし，募金で必ずオランウータンを助けられる。

子どもたちの感想（プランテーション経営者について）

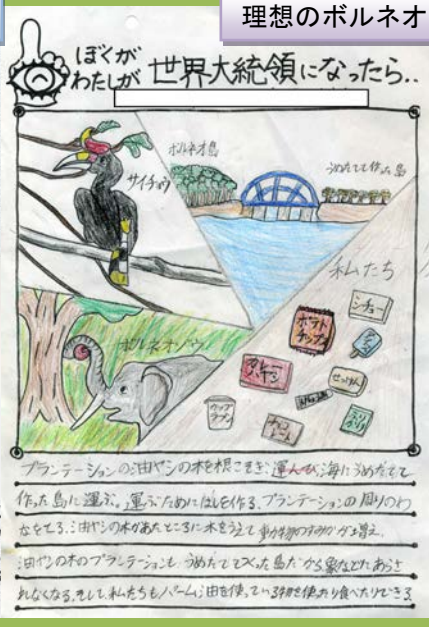
- 油ヤシ農園を経営するマシューさんにとって象はやっかいもの。象がプランテーションを荒らせば，マシューさんたちは，また油ヤシを植えなければならない。象も傷つかず，マシューさんたちも傷つかない方法があればいいと思う。
- 農園に油ヤシがあるから象は罠にもかまわず入ってしまう。そうすると新しく植えた木も倒されてしまうので，さらに費用がかかって大変。象は入らないと飢えてしまうけど，それを撃つのは間違っている。
- 象がかわいそうだけど，農園を守るために電気フェンスや針金を使って象を追い払うのはしょうがない。農作物を荒らされる農家の人はかわいそうだが，銃で撃つのはいけない。
- 私がもし社長だったら，象が来たら火をたいて追い払うかもしれません。せっかく植えた木が倒されたら絶対にいやな気持ちになる。象だってプランテーションのせいで食べる物がなくなってしまうので入ってもしょうがない。
- 動物が大切だと思っていたけれど，プランテーションの社長さんのことも考えると，せっかく作った農園が荒らされてしまってかわいそうだと思いました。でも，象は住む場所がなくなってきているので，どっちが大切かは選べない

子どもたちの感想（プランテーション農園で働く子について）

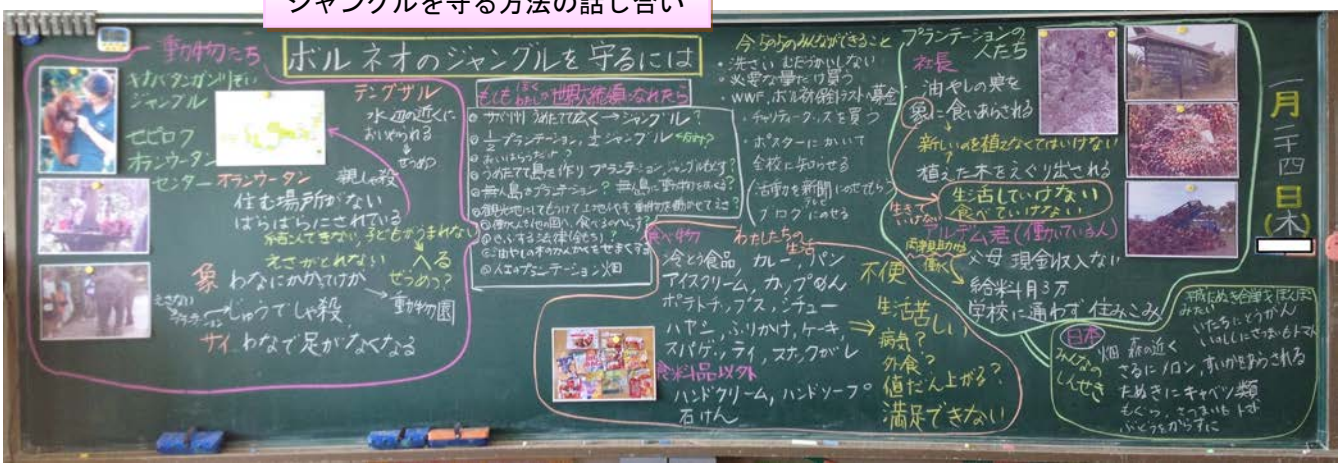
- 油ヤシのプランテーションがないと，アルデム君は仕事がなくなって家族が食べていけなくなってしまって大変。でも，少しだけでも油ヤシの木を減らしてほしいと思う。
- 最初は動物を大切にしないといけないと思ったけど，アルデム君のことを知って，動物の命も人間の命も大切なのでとても悩みます。動物の住む所もアルデム君が働く場所もあればいいのに。
- 今までオランウータンや森の動物たちがかわいそうだと思ってきた。でも，油ヤシのプランテーションがなくなればアルデム君は生きていけなくなるかもしれないし，私たちの生活もだいぶ大きく変わる。それでも生きていく限り，この状況は変わることはないんだろうなと思った。
- アルデム君と同じ立場になったら，動物よりも自分と家族のことしか考えられないかもしれないけれど，私はオランウータンの気持ちになってしまう。
- 自分が生き残るのは大事。でも，動物だって人間と同じように生きている。オランウータンの立場で考えたら，自分の住む場所がどんどんなくなっていくからつらい。

中日新聞の記事で学習した感想

理想のボルネオ島を想像する



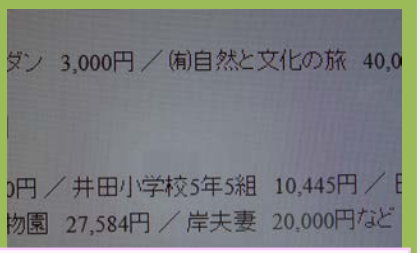
ジャングルを守る方法の話し合い



ボルネオ保全トラストジャパンへの寄付

郵便局で振込用紙に記入

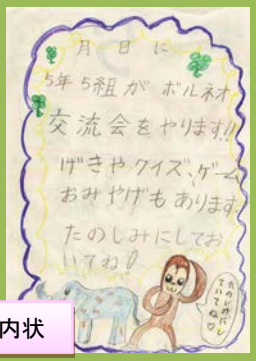
クラス全員で郵便局へ



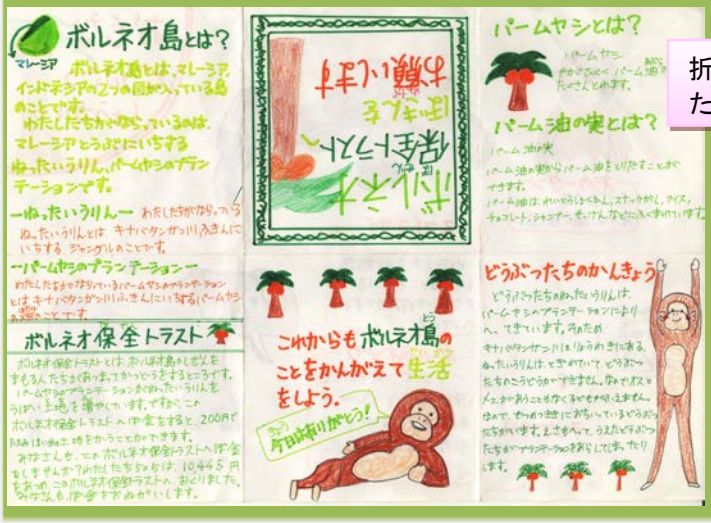
ボルネオ保全トラストのホームページに載ってますます意欲が高まる

グループに分かれて発信準備

バッジ＆シールの下

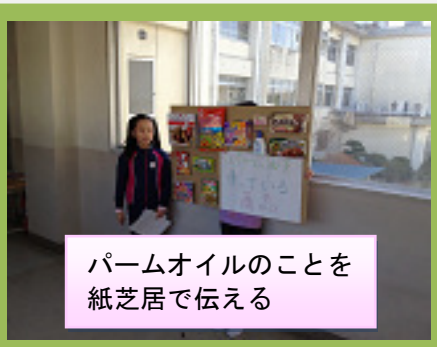


案内状



折り畳めるように工夫した

ボルネオ島の現状を紙芝居と劇で伝える



パームオイルのことを紙芝居で伝える

クイズを出して覚えてもらう

油ヤシを撃ってジャングルにするゲームで印象づける

動物を森の輪に入れるゲームで印象づける

バッジ，シール，ちらし等をお土産にして，家で思い出し，家の人に伝えてもらう